



馬車

風流

三



西國曲集卷之三

○攝津國曲

大坂

けり者といはれく其しき多計

嘆美ノ語也律儀者上云心

作者
不知

表

居士

中より公のや中を雀乃三ツ法痛

形占はつる免く保子共味味唱

燕説

水引はくも守の礼れ者ハ多く

野坡

まゝ此篇目乃流是一篇

士

元山より月母狂言の伝承を記し
修治のりて集と藤子吹雪のり
坡

表

燕説

南子りの角くすまの「連流
雀と梅子のつれぬはくし
町別てま切あそまをくむ
ふりて持神の清家やま
名目不濁、濁を挿入し
出り「砂糖の水をまぬ子
三惟
松堂
居士
芙蓉
執筆

別

修治のりて集と藤子吹雪のり
修治のりて集と藤子吹雪のり

おとけりて集と藤子吹雪のり
比治のりて集と藤子吹雪のり
修治のりて集と藤子吹雪のり
野坡

餘興

りて集と藤子吹雪のり
月とや入のりて集と藤子吹雪のり
修治のりて集と藤子吹雪のり
三惟
松堂
芙蓉

○播磨國曲

龍野

似蹟やわが乞ふ所は乃此乞振

計ト云爰言也

作者不知

淨心菴賦有畧爰

居士

自之痛れ二十障子や予と畫と為

雜念を乞口も乞はる女子の如 等年

未ありのし遠くの馬れつゝとて 紫七

聲わく聲乃あまきあく 夕開

由はらうとるをかくし能定乃由 吹万

あふのちをわたりて情を味ひて 溪士

若思をくかきよかきしむるは友一行

口ははらふをう通出旅人 燕説

凡雅をわたりてゆりて女をよむ花宴のさしといふは居士なりと云はる

あまのりし旅の節やもろりる 等年

破道美をさるるは侍しと如の下 溪士

かゝる志の多からぬをわたりて 夕開

十餘年とゆへ居士と云ふ

海へはる海へはるわを播磨深 唯好

毛うらとく清きも橋のりし杜鵑 紫七

餘興

春の物にふたつは花と梅の事
 八子代とほれ梅の事。お梅
 斑猫の縁らじく居れ若さ成、
 短中やもの縁りし。井戸車
 吹万
 水仙やとわらわの事。梅の
 暮らとよしく。梅の事。若さ成
 夕聞
 傘とよとわらわの事。梅の事。一行

牛穿れ餅くちりやとけし
 の梅の事。梅の事。梅の事。

同國佐用

居士

梅らとわらわの事。梅の事。梅の事。
 梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。
 梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。
 梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。

好興

梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。
 梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。
 梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。
 梅の事。梅の事。梅の事。梅の事。

○美作國曲

津山

暑きありや垣宿くくく人のてし

手ノ事也ウハ助語

作者
不知

表

居士

咲のれ栴乃愛化や八幸ゆき

離の知もきく世歌 川 首

南松

夢のれ六奇市よ宿信りて

燕説

よ紙糸おりの出たくも也

凡鳥

少極の麵持保多ありさるの月

樗羅

よくわ菌のけとりわと

鶴芝

表

推柳

今年こそまりのちり草下乃修

口きうを給よのぬり 若葉

燕説

中々有帰ふ如らにこそ解くもや

居士

中々れあくくもまのりてく

車二

若月よ沙意の善給れきくやう

樗羅

系人お探と一りくもあり

其痛

せれくよむやあうもそく甘くもく

螢娥

よらりしゆら那庵も世の中

遊柳

ふ 空の雲をよと坪井とてふ三三三送るて

空のしるしをよと坪井とてふ三三三送るて 櫻羅
 花て好味も清らや白し鳥 凡鳥
 出川入川しけ路も並や小松系 其滴
 好枝もよと坪井とてふ三三三送るて 推柳
 水あり流るるしゆ會の尾もよ 螢城
 鴨もよと坪井とてふ三三三送るて 鶴芝
 高柳もよと坪井とてふ三三三送るて 車二
 柳もよと坪井とてふ三三三送るて 緑珠

好味もよと坪井とてふ三三三送るて 南松
 若菜の目もよと坪井とてふ三三三送るて 壺客
 流るる声もよと坪井とてふ三三三送るて 松叟
 草外れ枝もよと坪井とてふ三三三送るて 吹風
 流るる水もよと坪井とてふ三三三送るて 猿之
 好味もよと坪井とてふ三三三送るて 蓬柳

餘興

うーとーれ耳もよと坪井とてふ三三三送るて 蓬柳
 好味もよと坪井とてふ三三三送るて 蓬柳

法々袖口にびん多れ 風 堂娥
 筆ていて盗人と片もくら 其滴
 小娘の如 隔と夜もや草乃とこれ
 陽を歩歩 踏を置れ 柳の車二
 堂見のよの移の機は小 拙地、
 名月乃ありのききさささ事 推柳
 柔の夜よ何と遊ばす式の道、
 母の如きとささささささささ 鶴芝
 其の如きや藤もこれ 築れ果所、

此の陽むの世や少くもやれりる色 樗羅
 口よやま火さばす比や高り花、
 上つてやうのりくく帰る 凡鳥
 香もあけ直さ有りく 山居あり、
 大判のしとささささささ 緑残
 七夕の試系とさささ 一本 酒 夫木
 沙焼の氣知くや好れ月 猿之
 向る奥や実子去年れ寒片し 是誰
 夕々ささささ 世とささささ 柳の 瓢去

同國久世

表

燕説

妙法乃繁々〜枝葉はく〜これ
 流もあつ〜これや〜
 永より此下りぬ〜
 兼乃〜
 かと〜
 え〜

且流
 居士
 芳船

同國高田

表

居士

多守ま〜
 堪〜
 陽乃〜
 船乃〜
 白壁乃〜
 木の〜

可風
 和風
 且流
 燕説
 和跡

居士乃以歸てしとくやも

ふりてはれあはるらよ

月づ連れれおらあららんん江に沓た袋ふ、嶺
 とつつ—一葉の小の枝やむらるる山重
 会の影乃むやらら流れう—擘心 且流
 平平事とくく半ままま路のひひ—一芳舩
 引合かく路の緒乃—一春のむ 可風
 月とりれ如切字也昔く輝るる 和風

餘興

常りやな油占一ゆらの光、嶺
 上代やあららまらあららら猶れあら、
 若月のあゆや船子ならぬ鳥 芳舩
 鷄鳴てるららとらなら相り也、
 あはららあはららの澄れ糸 且流
 一さららあらららあらららあららら
 浮梅乃あららとら古き白られ久世 翁意
 系申らるあらららの思らら附らる也 白鳥

已吹やあきし流のまほり霜水月
 ねりり月にはまはるく風乃和風
 非月流如水糸やらほお葉、
 繪りしあきさの雲そ中とあきし 可凡
 朝あき仕習あひんかたの色紙、
 一層もあきし口より紙あき糖久世 哥仙
 ぬすめあきあきあきあき人といふ曰 之由

○備前國曲

岡山

大分ト云要語
 でこぼこあきあきあきあき伊勢焼

作者 不知

表

居士

本底あきりし色あきあきあきあき
 あきあきあきあきあきあきあきあき
 水乃口此流の流あきあきあきあき
 面白くあきあきあきあきあき
 うた乃あきあきあきあきあきあき
 いあきあきあきあきあきあきあき

山知
燕説
機石
楓鹿
如醜

表

表の初巻の巻序に「客袖と拵切きまへ山知

宿 細乃 墨守のく 何日か ちの 旅

子 策の 行く 各々の 家 居士

永 来り 何の じの 障の 梅林

い 川 流の 船の 月 籠 也 吉治

く 風 の 小 海 の 何と 吹の 燕 説

喰 子 の じの 何の 何の 真 瓶

川 流 宿 一 香 子 宅 子 子 子 子

見 何の 何の 何の 何の 山 知

堀 越 や 余 所 の 居 世 と 就 之 拵 一 香

世 何の 何の 何の 何の 知 義

風 何の 何の 何の 何の 楓 麻

草 何の 何の 何の 何の 一 香

○備中國曲

宮内

芝の葉也 是非正ト云心也 ちやのちち 作者不知

表

高吉

支のこ子 鈴鈴 林やりの 飛付

くま と 羽虫 宿 婦る 小葉 々々 居士

咭あう ける 申の さま 東風 吹て 燕説

まの とも さま けと 結る 雲道 吉

菊 咲き あり ぬ み くる とも 居士

流 海 岸 ちや 中 じに ち 説

同國倉敷

一巡

燕説

んん 心 友 ち 海 也 柳 蝶 の 昔 夢 也

空 しく ちや ちや ちや ちや 柳 風 柳 邑

永 あり ぬ 空 引 繩 子 ちや ちや 居士

庭 あり ちや ちや ちや ちや ちや ちや 菘 里

三月 月 ちや ちや ちや ちや ちや ちや 露 堂

芝 の 柳 綿 一 ぬ ちや ちや ちや 故 構

杖差り一筆の流れ水もあ 師雄
 三盃もあまの酒は管生 眩風
 隣一也は火の流るやまのまは 野圭
 ぬきけりて夕影の世 執筆

餞別

市人ふんふの流るる 高吉
 首代中踏あまの別とれ 眩風

居士 燕流 南師のときり 口も
 も又り下知れ世もあまの

盃相り 是もあまの酒は 相邑

楚州の井とあまの酒はあまの

ふも沈まらば在る声も細の井 菘里
 空をくは杖と体もあまの酒は 除柝
 衣もあまの酒はあまの酒は 何虹
 くらもあまの酒はあまの酒は 直史

飯具

魚子餅とあまの酒はあまの酒は 露堂
 多の目もあまの酒はあまの酒は 高吉
 ちりちりあまの酒はあまの酒は 田螺堂

己亥子道乃山記やら何ト 枳邑
 口口横りしは如波子し成り母、
 似乎相好草うらゆかき挿は 故構
 華や山来宗れすは如中々 師雄
 山系花子鼻しく居れく如り成 文剛
 柔乃くぬやぬり鳥れ居りし 時風
 るの此れそ運らしり一乃の月 兼里
 鳥帽子乃りぬ肘のさきと如波り居、

同國井原

表

居士

角文字れは也二なり李の靴
 羽の成体ま如るるあつこの 正典
 例年の修りし田歩り佳りれく 燕説
 空られあらさるいけ強かや 掃夫
 其れをみたりも雲を色梅の月 宗也
 其れをいしあつたれお若 執筆

錢別

水もろ猫り切蝶のやうな
川越や跡よりひいて誰か
笠くはきあふう一はつと
宗也

鎌倉

名目や境をかふ夕暮音
梨のやけの指のまゝ一
はつと
掃夫
正真

○備後國曲

尾道

いとゆるい千箇のうらみ夕涼

座せよト云妻語也

作者不知

表

居士

昔茶や時りし屋子の舞の袖
湯洗ひ乃六前りよ風吹
盤石松のしほり一盃一故
ふふれ行しうらみ折高帽子
其の
志の了建つるお金持の
聞可

吾猶此と口をきりて草の中 可雪
此いくみりてある新綿 一芳

餞別

心懐きやまの葉のしれ眩ゆる里 已禮
おゆりやうまのまのこもる嵐 作系 一故
きくことしれまよひしけか幾時か 可雪
ふまふとれそえみんを心懐百合 其芝
何れそらもあはれ惜しむるあな無業 聞可
おかつとて扇よりいふ別道とて南 鞠 一藤

餘興

有園と告ぐあそびやけりてあはれ 已禮
柳緑や立とゆりて啼聲のあそび 其芝
あそびあそびあそびあそびあそび 可雪
あそびあそびあそびあそびあそび 可雪
あそびあそびあそびあそびあそび 一故
あそびあそびあそびあそびあそび 已禮
あそびあそびあそびあそびあそび 一藤
聖靈のあそびあそびあそびあそび

同國鞠

表

居士

借重著千の海の坊さや衣うえ

古流り、松風体中とのり 一藤

鳥啼くおのれ西の暮来て 燕説

綿一繡流り声志のう也 士

室を中と程思ふ袖の月白 藤

海も互に留も上うさる 説

○安藝國曲

廣島

おのらやまや西条橋と枝さる

ヌマハレト云心也

作者 不知

表

居士

天秤の音りしは名白牡丹

あう年一と夏のふゆお十分 常也

乞恥たよまてんてん人おるおんはく、

紫ささりて壊れよハシきぬ也 燕説

二日月は入海りくおんおの声、

船うさめて舟おんおれさく 士

同國嚴島

表

燕説

遊跡始々くしつたさるる何れも
 物外の子れ垣外志くす 胡洞
 居心して其よ義えを材行せとく 居士
 このよめ如照りしよの一廻 雲五
 自り水清くは疊れおとくを 伴古
 年暮母子乃根占菊の世 恐伯

餞別

只二人飽も忽旅ながら 伴古
 一吹り風や追ゆくはなす 衆臨
 解のあつくもやとりの 良儀
 居るる里松りしやうの 雲五
 是の臨り相さうに 胡洞

餘興

ぶるの尾く流はらふ月 常也
 知は年と思へて減るは 常也

道去らりも未だりたりや練鼓の雲五
 舌のぬれ碎るや浪のしづ蛙
 元山子何の何情と羊躑躅 怨伯
 佃鳩の歌成てありく接あは
 薩佛や心結くの世もれあはり 壺天
 梅の香と涌り合ふるにまの路の
 川吉也や中ら占時ぬれ結るうら 机毫
 すと濁るるうら涌るむらさき守 胡洞
 口よりうらへく我の宿とくことゝ

○周防國曲

遠石

言答やまゝ人々

サモアレノ畧語也

作者 不知

表

燕説

揮合の如芥子の露もあつて
 舟路の如くわらわらわらす 浮卜
 盃の酒もなれ石りのをまきあ 暁明
 袴の着ぬるにゆるゆる也 居士
 招待の使もあつて夕月も 等竹
 鳴りあつてあつてあつて 執筆

三拍

居士

拍教奇哉唱くり市中の凍鼓多

名河一は唯く名神一乃也 小倉 柳推

下と行り山乃後いれ海並り 燕説

錢別

はえはうやうとや尻茄子 立枝

飯奥

草餅子何れゆるり伊吹山、

志のくまに流るる朝のやうきよ

西國曲集三 訖

